

トピックス

年賀切手になった郷土玩具

富永 紀子

年賀切手の発行

最初に年賀切手が発行されたのは昭和10（1935）年、年賀郵便の早期差出奨励と利用増進を目的としていた。この時の意匠は渡辺崋山の「富嶽図」であった。

昭和11（1936）年用の年賀切手が広く評判を呼んだため、翌12年用は一般から図案募集をすることになった。昭和11年5月4日の官報で募集を開始した。応募総数は1,481点だったが、1等に該当するものがなく、2等2点、3等3点が選出された。しかし、そのまま図案に使えるものがなかったため、2等2席にあやかり二見浦夫婦岩の写真に輪郭部分を描き加えて原図を作成した。

昭和12年用の年賀切手が発行された翌年7月に日華事変が勃発、時局が緊迫すると紙の消費節約と国家資源確保という国策上の見地から11月には年賀状停止が閣議決定された。年賀切手の発行は12月の昭和13（1938）年用を最後として中止された。

終戦後、年賀郵便取扱制度の復活の要望が高まり、年賀切手の発行は昭和23（1948）年12月から再開した。

年賀切手と郷土玩具

今や年賀切手の意匠といえば全国各地の郷土玩具が欠かせないものであり、その年の干支にあわせて多種多様な郷土玩具が採り上げられてきた。郵政博物館で収蔵している郷土玩具資料のほとんどは、技芸官（現在の切手デザイナー）が年賀切手の原図を作成する際、実際に参考にしていたので、郵政省時代に移管されたものである。

年賀切手に郷土玩具が意匠として使用されたのは昭和28（1953）年用からである。それまではしめ縄やはねつきなど、新年を寿ぐ意匠であった。

その時意匠となった郷土玩具は京都府京都市の御所人形「三番叟」である（この時は巳年である）。

翌年以降も年賀切手の意匠は郷土玩具であったが、特に干支をテーマにしてはいなかった。午年と戌年はそれぞれ干支の郷土玩具であったが、意識をしてはいなかったように思われる。

干支を意匠としたのは昭和35（1960）年用からである。しかしながら、干支にこだわっていたのではなく、デザインが面白いという理由で選ばれていたようである⁽¹⁾。干支の郷土玩具をテーマとした年賀切手は十二支を一巡するとまた、正月らしいおめでたいものをテーマとしたものに戻るところか、宝船や色絵土器皿のように郷土玩具ですらなくなってしまった。

昭和51（1976）年用からは干支の郷土玩具を意匠としたものに戻ったが、それもまた、十二支を続けるかどうかはその時にならないとどうともいえない、と当時のインタビューにある⁽²⁾。

なお、令和2（2020）年用の年賀切手からは、川崎巨泉の描いた郷土玩具の絵（おもちゃ絵）

1 坂本一也「年賀切手の赤ベコと黄金牛」『切手趣味』第52巻 第1号 昭和36年1月1日発行 3頁

を意匠としている。

新型コロナウイルス感染拡大で、厄除けのご利益をもたらす妖怪アマビエが世間の話題となったが、郷土玩具もまた、さまざまな願いを込めて作られてきた。郷土玩具とは、古来より作られてきた玩具で、色鮮やかなものが多く、特に赤い色がよく使われている。なぜかという、赤は魔除けの色、病除けの色だからである。ほかには地域の特産物を用いたもの、信仰に結び付いたもの、動物などをモデルにしたものが多くみられる。大半は長い伝統を持っているが、近年では新たに創作されたものも増えてきている。

収蔵している郷土玩具を、その制作意図別に分類したものの一部を紹介する。

〈五穀豊穡・豊作〉

御所人形「三番叟」・薩摩首人形「米倉ねずみ」

豊作を祈っての米倉や三番叟をモチーフにしたものが多い。

三番叟は式三番のことで、日本の伝統芸能である。式三番は能楽が成立する以前の様式を留める芸能で、元々は五穀豊穡を祈る農村行事である。三番叟は文学や歌舞伎などの芸能で行われるめでたい舞いで、人々に五穀豊穡、幸福を授けるといわれている。



米倉ねずみ（平成8年用）

〈伝説・似姿・風俗・供養〉

「三春駒」・「吉良の赤馬」・「のぼりざる」など

郷土の英雄や伝説などを基にその姿をモチーフにしたもの。

三春駒は、平安時代の武将・坂上田村麻呂が蝦夷討伐の際に苦戦していた時、どこからともなく現れた木馬に助けられたという伝説から生まれた子ども用の玩具「子育て木馬」が発祥といわれている。



三春駒（昭和29年用）

〈玩具〉

「こけし」・「米食いねずみ」・「竹へび」など

子どものための玩具やお土産として作られたもの。

日本全国それぞれの土地で古くから、土地の風物、習慣、信仰に結びついて作られてきた玩具。お正月やお盆、社寺の縁日で売られたり、湯治場のお土産物など、主として子どもたちの遊び道具として親しまれてきた。



米食いねずみ（昭和35年用）

〈祭・神事・天神信仰・民間信仰〉

「鯨の潮吹き」・三次人形「寝牛乗り天神」など

神社など祭りの奉納の演じものや神事に用いる人形などをモチーフにしたもの。

天神信仰は、天神（雷神）に対する信仰である。特に、菅原道真を「天神様」として畏怖・祈願の対象としている。天神様と牛にはたくさんの縁起や伝承がある。菅原道真の遺骸を載せた車を



寝牛乗り天神（平成21年用）

引く牛が座り込んで動かなくなった場所を墓所と定めたことからとする説や、大宰府へ下される際、牛に乗っていたなどさまざまな説がある。

〈魔除け・厄除け〉

「犬張り子」・深大寺土鈴「まき巳」・「加賀魔除虎」など

赤い色を使ったもの、犬張り子などが多い。

赤い色は「太陽・炎・血液」といった、生命に関するイメージを思い起こさせる。赤が命を司るのであれば、その力は魔除けや厄除け、病除けになると考えられてきたからである。江戸時代では、赤いものを子どもの周りに置いてお守りにしていた。

犬の郷土玩具としてよく知られる犬張り子も、産室に置いて魔除けにしていた犬笛が起源とされている。



犬張り子（昭和33年用）

〈縁起物・開運〉

笹野一刀彫「にわとり」・西会津張り子「首振り招福卵」など

だるまや起き上がり小法師、動物などを象ったもので、寺社の境内などで売られている。

だるまは、インドから中国へ仏教を伝えた僧・達磨大師の座禅をした姿を模したもので、赤色を基調としたものが一般的である。これは赤が古来より魔除けの効果があると信じられていたからである。



にわとり（昭和44年用）

〈病除け（コレラ・疫病除け）〉

「赤べこ」・「むぎわら蛇」・「少彦名神社の張子の虎」など

麦わら細工の蛇は、夢のお告げにより疫病除け、水あたり除けとして霊験あらたかと評判になったといわれている。麦わら蛇を水道の蛇口や水回りに祀ることにより、水難から守られ、日々安泰に過ごすことができるとされた。

江戸時代にコレラが流行した際、張り子の虎を無料配布した少彦名神社が祀っている少彦名命と神農は、どちらも医学や薬に関係している。少彦名命は医学の神、神農は医療と農耕の知識を古代の人々に広めた存在だと伝えられている。



赤べこ（昭和36年用）

〈幸運・商売繁盛・勇気と勝負強さ・大願成就〉

「金のべこっこ」・「張子の虎」・「願かけ牛」など

日本には古くから「撫で牛」信仰があるといわれている。自分の体の悪いところを撫で、その後牛のからだの同じ場所を撫でると、悪いところが牛に移って治るといわれている。

虎は、勇気があって勝負に強いことから郷土玩具として作られており、武勲を願って飾られていた。



願かけ牛（平成21年用）

〈良縁祈願・安産・長寿〉

「忍び駒」・「守り犬」など

縁結びに信仰著しい観音堂に、願いを伝える使者として作られていたものが、郷土玩具となったものが忍び駒である。

守り犬は無病息災、長寿や安産を祈願するお守りとして作られた。守り犬を作ることができるのは、法華寺の精進潔斎した門主と尼僧だけで、一般の人は手出しができないことになっている。



守り犬（昭和45年用）

〈地元の特産物・農閑期の副業・産業発展〉

すげ細工「いのしし」・「たつぐるま」・堤人形「獅子乗り金太郎」など

樹皮や和紙など地元の産物を用い、豪雪地帯の農閑期や冬の間の内職として作られてきた。冬、家主が出稼ぎに行った留守をあずかる年寄りや女性たちが炉端を囲み子どもたちに昔話をしながら作った。

また、藩主が職人を招いて農民たちの副業として奨励したのものもある。



たつぐるま（昭和51年用）

〈創作〉

小幡人形「小槌乗りねずみ」・「桃持猿」・高山木版手染ぬいぐるみ「亥」など

郷土玩具は、郷土の伝説や信仰などを反映しており、その土地ならではの味わいを持っている。また、子どもたちの成長を願い、身近にある紙や木などを使って玩具や人形が作られた。しかし、近年になって、素朴な造形美や郷愁を感じるような、制作者が新たに創作したものがある。



小槌乗りねずみ（昭和59年用）

〈誕生祝・端午の節句・子どものお守り・成長〉

博多張子「虎」・稲畑人形「子兎土鈴」など

子どもの健康や無病息災を願ったもの。

江戸時代は疱瘡など、疫病で命を落とすといった、大人になるまで育つ子が少なかったので、子どものお守りにしていた。科学や医学の発達していなかった時代、目には見えない襲い来る病気や自然の脅威から身を守っていた。

端午の節句は、子どもの無事な成長を願うとともに、子どもの夢を温かく見守るものとして飾られた。



子兎土鈴（平成23年用）

（とみなが のりこ 郵政博物館担当部長代理）